

## ライマン雑記(19)

副見恭子<sup>1)</sup>

### ライマンと助手たちⅧ 7人の助手たち(Ⅲ)

#### 1. はじめに

「ライマンと助手たち」を「ライマン雑記(12)」で書き始めてから、4年以上の歳月が流れた。遅筆の主な原因は、助手たちの資料集めに時間をかけたことにある。寡黙の人だったライマンは、莫大な文書を残しており、助手たちとの文通も数多い。調査している中に、安達仁造・賀田貞一・桑田知明・島田純一・西山正吾・山内徳三郎の6人が、帰国したライマンに助手たちの近況を伝え、師の近情を、稲垣徹之進・杉浦謙三・坂市太郎・前田精明・山際永吾の5名に知らせていたことが明らかになった。山際永吾が大切に保存した書簡の中に、1904年4月19日付のライマンの礼状がある。コピーをよく見ると桑田宛だがライマンの筆跡ではない。更に注意すると、桑田が写したのでもなく他の助手5名の筆蹟とも違う。山際が桑田から手紙を借りて、ていねいに一字一字写したのではなかろうか。師の情報が、このようにして、助手たちの間で取り交わされたのだと思う。

稲垣・坂・山際の親族の方にお会いして、彼らの言葉や態度からライマンへの敬慕を感じ、遺徳が不滅であることを体験した。しかし、記憶が断片的なので、書簡のように感情移入ができず、資料として用いなかった。幸いに山際永三氏から祖父永吾の資料を何回にもわたってお送りいただいた。特に最初の北海道地質調査1874-75年と幾春別発見を含む1880-81年の日記は、大変貴重な資料である。以下に最後の助手4名、山際永吾・稲垣徹之進・杉浦謙三・前田精明について記す。

#### 2. 山際永吾

山際永吾は、嘉永6年(1853)5月15日会津若松城郭内二ノ町に生まれた。明治の人なら、彼の生年と出生地を聞けば、すぐに白虎隊を想起するであろう。明治元年に会津藩の16歳より17歳の少年から成る白虎隊が官軍と戦い、力尽きて自刃した美談は後々まで語り継がれた。落城後、朝敵の汚名を着せられた会津藩の士族は、どん底に落ち、筆舌に尽くし難い辛酸をなめた。そしてすべてを失い、会津武士道だけが残った。

山際永吾は、十歳にして藩校日新館に入館し、文武両道を学んだ。この藩学は水戸の弘道館、薩



第1図 山際永吾と家族 左から永吾, 太郎, 春(山際永三蔵)。

1) 元マサチューセッツ大学東洋コレクション司書:  
8 Eaton Court Amherst MA 01002 U. S. A

キーワード:ライマン, 山際永吾, 稲垣徹之進, 杉浦謙三, 前田精明

摩の造士館の歴史よりも一世紀以上古く、国学・漢学・洋学・医学・天文学・算術等を教えた。また藩校内に図書館・印刷所・観測所・プールなどの近代教育施設があった。会津の不屈の精神と教養が日新館で養われ、家庭教育の軌範となった。

例えば、東大総長を通算約12年務めた山川健次郎、ヨーロッパで武士道を語って文豪ストリンドベリを感銘させた明治学院總理 井深梶之助、「ある明治人の記録」の著者、陸軍大将 柴 五郎は、日新館出身で、明治の偉大な先覚者であった人々である。彼らは、人々を自ずと信服させる品格を備えていた。大山捨松は山川健次郎の妹で、明治3年(1871)津田梅子らとアメリカに渡った最初の女子留学生である。欧米の文化を殆ど知らなかった彼女が、8年後にアメリカ女子大学の名門バツサー大学で、数々の栄光を受け、教授や学生に尊敬されたのは、彼女の会津精神と教養の肥沃な土壌の上に、アメリカの自由教育が非凡な花を咲かせた良い例であろう。

永吾が12歳の時、父山際久太夫が蛤御門の変で戦死した。父の功績によって百四十石を与えられ、14歳で世子の小姓役についた。世が明治に改まると、彼の身边は激変し、先ず9月に、会津藩が官軍に破れ、11月の始めに江戸に護送される松平容保一家に付いて上京し、謹慎の身となった。明治の世を迎え、武士たちは運命にもてあそばれたが、山際も例外でなかった。

謹慎者の一人が禁を破って夜堀を乗り越えて外出したのがばれ、違反者を差し出すよう命じられた時、少年なら厳刑にはならないだろうと、山際に身代わりを頼んだ。彼は泰然自若としてその役を引き受けたと言う。そして江戸城に近い辰の口牢屋で、五稜郭で官軍に降伏した重罪犯人榎本武揚・松平太郎・大鳥圭介・荒井郁之助等に会った。ここから新しい道が開けていく。

…、榎本氏特に君を愛し、大鳥氏と共に英学及数学を教ふ、当時榎本氏其即吟を半紙に書して君に与へたるもの、今尚ほ家に蔵せり、君の諸氏に先ちて放免せらるるや、直に諸氏の渴望したる奈良漬一樽を檻邸に贈り、大いに其親切機敏を悦ばれたることありと云う(注1)。

山際は獄中で彼らの薫陶を受け、たくましい人間に育っていった。放免後沼間守一塾に通った。沼間は、明治の民権論者として有名だが、幕末にヘボンについて洋学を学び、後に大鳥圭介や土方歳三と共に洋式装備の伝習隊をひきいて、会津若松で戦ったことはあまり知られていない。

明治5年(1872)5月、榎本武揚は開拓使出仕に就任、横浜から北海道へ出発した。一方山際は数ヶ月後に芝山内増上寺境内にある開拓使仮学校に官費生として入学した。仮学校生徒表の山際の父兄引受人は、第四大区小二区今川小路町三丁目榎本武揚邸内 静岡県貫属士族 榎本武与で、武揚の兄である。明治7年、山際は、島田純一・西山正吾・前田精明と共に、第二回北海道地質測量調査に参加した。

## 2-a. 北行日記

「北行日記」は、地質鉱山士長ライマン随員の命を受けた明治7年5月6日から始まる。18日に、蒸気車(汽車)で東京を3時に出発し、午後7時過ぎ米国飛脚船(郵便船)ニーヨルク(ニューヨーク)で横浜を離れた。20日函館着、翌日上陸し、「東京横浜ニ比スレバ箱館ハ尚田舎ノ風ヲ免カレサルヲ覚ユ」と述べている。

24日、ライマンとマンローに旅立ちを告げ、一歩先に札幌へ向った。馬具は坂市太郎と共用のため、一日交代にし、初日は山際が荷鞍に乗って終日を過ごした。翌日は逆風で、森から室蘭まで噴火湾を渡るのに5時間かかった。室蘭-白老-苫細(苫小牧)の旅で、北海道の大自然が如何に苛酷であるかを山際は体験した。5月末にかかわらず、薄ら寒く、風が峻烈で、幌別川とシキウ川(敷生川?)の橋が落失していたため馬で川を渡り、衣類を濡らし、疲労困ぱいして白老に達した。苫細までの海浜伝いの旅は苦難の連続で、「風激しく、雨具を吹きはぎ、寒気甚しく手足等知覚を失う。」と記している。午後雨が止み、陸路に変わり、難なく千歳の本陣に到着できた。28日、明治開化を誇る札幌の開拓使庁舎を眼前にし、山際は、はるばる江戸から新天地にやってきたことを実感したに違いない。

第二回北海道地質測量調査は、石狩川を遡上し、上川盆地を横断して大津に出て、道東道北を海岸沿いに調査するライマン秋山美丸隊と助手た

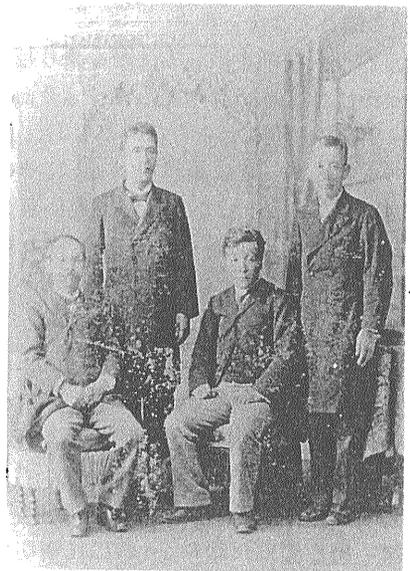
此身と山内氏及坂氏の夜川内ノ小屋ニ至リ油ス  
 同十九日曜日朝船兩降ル予等イタヒニリノ居ラ河内  
 ノニ騁スシク朝船とテ同ハニイタヒニリノ居ラ河内  
 フト騁ノ少ノ概甚固言クハ先カハ且ツ岩モ山内改  
 修ノ請ヒ思ハシ予等氏トモ河内ノ杉原ノ上流ニ  
 閉リ石炭ヲ購フ事甚急固ハトモ甚ク急ニテ河内  
 河ノ下流ニ至リ遠ニ見スニテ居シ  
 同廿日舟渡取政ニ不等騁甚ク止ラテ河内ノリ  
 同廿日朝船後橋谷ト録一テ切り岸陸質田氏ト金ヲ得ニ  
 飲シテハハテ洗フニ會フ然レトモ莫切空ニク只ハ河内ノ  
 館スハハ然レトモ彼ヲ欺クニトハニ煙モ甚クテ河内ノリ  
 フ甚少船中ハト置モ思チ彼カ為ニ見破ラレ甚謀成  
 ラカリニ彼却テ他ノ天幕中ニ疲リ居ルヲ謀ラニ不ニ計ル  
 物ヲ示甚急ニ極ニ高層多ク營銅匠ヲ其中心ニ削リ込メ  
 質田氏ハ尚ホ未ニ水準ヲ取ラテ然ラテ故予先々帰登レハ山内氏  
 在リ予改ニ向ヒ質田氏ハ全脈ヲ発見ト懐ニ先ト高層多帰ラヌ知  
 シ甚急ニ予ノ知ルハ非ス銅匠レ少ク見テ例ノ物餘ラ  
 出セニ彼甚ク驚物ト思ヒニ高層多ク中ニ先ヲ発シテ營ニ  
 者ハ即チ金ナリト驚甚ク予抱腹極ニモ甚急ニ居リト柔田  
 氏モ驚リ奔リ予等ヲ信セリ後鏡ヲテ質田氏モ帰リ良ト營  
 ク河内ヲ歸キ置キ後考ハ船詐ヲ告ケニ山内氏ハ怒リ予ヲ  
 食言人ト名ニテ又ハ鴨崎又一番談ナラセヤ

第2図 北行日記より(山際永三蔵).

ち2組で行われた。山際の属したパーティは、豊平川出水のため一日出発を延期し、6月11日、札幌を出て雁来村より舟に乗った。終日雨が降りしきり、河水が増水し途中でテント生活を余儀なくされた。10日目によく晴天になったので早速出発したものの、川が朽木や枝木に覆われ、時には大木が流れてくるので、のこぎりや斧で行く手を開かねばならず、遅々として舟が進まないため、その日の行程は4里に過ぎなかった。翌17日、舟は幌向川から幾春別川を上ってイチキシリに立ち寄っている。彼らは、砂金一粒なく失望したことであろう。一里程で石炭山の入口に達すると聞き、彼らは荷物を舟に託し陸路をとったが、途中道なき道を歩き、折からの雨で川が隘流してなかなか前進できず、四苦八苦の末、ようやく幌内炭田に着いた。

第一日目、坂市太郎と共に山に入り、測量を行った。しかし雨が降り出し作業を中止、未だ食料が届かないので緊急手段として、山際は釣りに専念した。24日の日記に「來曼(ライマン)氏到着」とある。大いに活気付き、実地測量、測定、レッスンと忙しくなった。29日、ライマン一行は上川盆地へ向って出立、代りに一日遅れて、全快した山内徳三郎を迎え、測量調査に拍車がかかった。

これまで日記に出てきた山際のパーティメンバーは坂と山内であるが、一体何人で、他に誰が参加していたのだろうか。先ず6月21日曜日に草庵を作る人夫監督のくじを引いた桑田知明、7月2日「西山氏ノ切りシ処ノ線ヲ予水準ヲ取り四字過キ庵



第3図 左から桑田知明、山際永吾、西山正吾、坂市太郎(山際永三蔵).

ル]で西山正吾、翌日の日記「賀田氏ノ線ノヨリ百四十度ニ九本ヲ切り五字ニ帰ル」で賀田貞一、これに山際を入れて全員6人であることが確かになった。

7月14日、久しぶりにイクシベツ川(幾春別)の平地の生活になったが、80度の暑さと蚊、ブトがすさまじい。「暑氣ニ堪ヘズ其困難言フ可ラズ」テント内で体を覆って図を引いている山際の苦しさが伝わってくるようだ。5日後河内川に移った。山谷の居は、蚊、ブトが少く、暑さもさほどでなく、谷と川を測量する平凡な生活が続いた。しかし次のような微笑ましい出来事もあった。

「谷ト線一千ヲ切り帰路；賀田氏、沙金ヲ得ント欲シ沙ヲ洗フニ會フ然レトモ其功空シク只沙鉄ヲ餘ス而已」。山際は、突然一計を巡らし、煙管の金属を削って砂鉄の中にこっそり交ぜたが、直に見破られた。賀田に、天幕にいる連中を担いだらと唆され、もっと砂に黄銅片を削り込んで、賀田を置いて天幕に戻った。西山に「賀田氏が沙金脈を発見し、まだ帰らないのだ」と言って砂鉄を見せると、例の黄色の片が光を発し、彼は「真ナリ真ナリ」と嘆賞した。戻った桑田も砂金と信じて感心していると、賀田が帰ってきて、しばらくして欺瞞であることを告げた。「西山氏大ニ怒リ予ヲ食言人ト為スト云ヘリ。嗚呼又一奇談ナラスヤ」でこの日の日記は終わっている。茶目っ気の山際、慎重だが稚気がある賀田、真摯な西山、大まかな桑田と各人の性格の一端がにじみ出ていて面白い。

彼らは、幌内本流からイクシベツ河、川内川、ポンチプラセ、美唄川と測量を続け、遂に石狩川に達した。7月29日の日記に「——此日石狩河ニ達ス即チ「ウラシナイ」ノ下ニテソキシナイノ僅カ下流ナリー中略-河巾五十六七間ナリ幌武井石炭山ヨリ惣距六萬七千四百六十二尺ナリバイヨリ石狩川マター萬一千六百六十二尺ナリ」とあり、彼らの大作業は終了した。

8月に入り、ヌッパマナイに移り、図を引く日が多くなった。或日、食物が突然に尽き果て、砂糖一粒さえなく、米・塩・味噌だけの窮地に追われた。札幌へ買い出しに行った人たちが、食料とともに、新聞や東京よりの音信を持って帰ってきた時は、キャンプ全員が歓喜した。「仙境ノ思ヲ去レリ」と山際は感想を述べている。

8月23日、「大鳥先生午前ニ来リ大ニ混雑セリ」25日、「大鳥先生、石炭ヲ検スルヲ導ス」と両日各一行の記述であるが、山際の晴れの舞台だったのであろう。辰の口牢獄で、彼の将来を憂い、榎本武揚と共に数学や英語を教えた大鳥圭介の炭山視察を先導した折の山際の胸中は、如何であったろうか。

やがて野波遠満内の上流に移り、しばらくしてバイの支流に移動した。10月の始めに遠山に白雪が見られ、野業よりも作図の仕事が主になった。暇があると釣りをやれば、鯉やウグイ等が面白いように捕れた。「同十三日火曜日晴 予カ爲スベキ図モ略ニ尽キ天幕中ニテ只茫然タリ」、明治7年の北行日記は、不意に10月13日で終わっている。

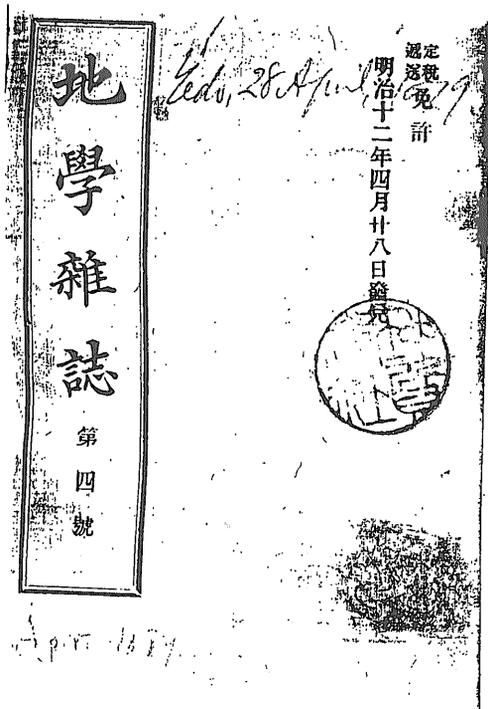
翌年、調査日記の始めに、大きく「明治八年六月北海道筆記」と書いているのにかかわらず、6月1日、ライマンの随行を命じられてから、27日の札幌着までたった2ページで中断している。開拓使のライマンへの冷遇と関係したのではないだろうか。

6月23日、ライマンは、長万部・黒松内・岩内・余市・小樽経由で、7月5日に札幌に到着した。翌日、東京からの命令として、幌内鉄道測量調査を開拓使下級役人から伝達された。江戸で鉄道調査の話はあったが、命令は寝耳に水で、耳を疑った。しかし門外漢の仕事を押しつけられ、受諾する外はなかった。過去2年間忠実な助手で良い相談相手だった山内は、内務省勸業寮に勤務し、秋山美丸は物産局へ移され、ライマンは両手を失った思いであつたらう。あまりにも一年前と違う現在の境遇にしばらく茫然としたに違いない。

監督権の問題で開拓使と争った事件は、「ライマン雑記(11)」で語った。しかしこれは発火点に過ぎず、ライマン開拓使政策批判が動機である。当時の開拓使役人の無知・無能・浪費・欺瞞・腐敗は周知の事実だった。そして5月に、開拓使顧問ケロンが帰国すると、露骨にライマンに圧力を加えた。

8月1日、幌内鉄道測量調査を本格的に開始したが、9月10日には調査を中止し江戸に戻るよう勧告があった。慌ただしい中途半端な仕事の上、20日の雨天で自然すらもライマンに無情だった。

彼は、1875年北海道地質調査報文で「地質助手稲垣・三沢・高橋・賀田・坂・島田・山際・前田・西山の忠勤精励に大いに満足し、彼らの助力に満



第4図 地学雑誌(マサチューセッツ大学図書館蔵).

毎月一回發兌  
定價一冊三錢 一ヶ年分前金三十錢  
府外遞送ハ別ニ郵便税一冊二錢ノ割ヲ以テ申受候  
且郵便局無之地ハ一冊ニ付一錢ツ、増税申受候事

東京飯田町二丁目五十一番地

假本局  
地質學社

持主  
桑田知明

編輯兼印刷長  
島田純一

東京照降町  
熊谷庄七

同虎ノ門外琴平町  
靜價堂

同馬喰町  
島村利助

腔の感謝を表す。」と記している。助手たちがライマンの心情を察し、山内・秋山に代わって、最善を尽くしたのでなかろうか。

明治9年(1876)5月、山際は同僚9人と共に内務省勸業寮に入り、地質測量助手としてライマンの越後油田調査に同道した。翌年工部省に移り、ライマンの契約が切れた明治12年まで測量を行い、地質学を学び、地質技術を磨き、開拓使仮学校以来足掛け7年の間に、山際は日本最初の本格的な地質技術家に成長した。ライマン離日の年の、明治13年5月に開拓使に戻り、4ヶ月にして幾春別炭田を発見している。運もさることながら、約7年間のライマンの教えが、実を結んだといっても過言ではない。

### 2-b. 幌内幾春別日記

明治13年の日記の表題は「日記」であるが、「幌内幾春別日記」と呼ぶことにする。「北行日記」と同じく線引きの和紙を紐で綴じた日記帳であるが、前者の玉林堂印と異なり、和紙に金花堂の印が押されている。表紙をめくると、「明治11年12月24日婚」の文字が目に入った。次のページの「明治12年2月17日に春の送籍と寄留届を終えた」の一行と

もに、短い記述であるが印象的で、山際の新しい人生出発の覚悟がずしりと伝わってくる。

山際 春は、会津藩江戸留守居役神尾英俊の次女として生まれた。母は会津藩家老田中土佐の娘である。姉栄は、山際の僚友稲垣徹之進に嫁いだ。この二人は開拓使仮学校女学校に通い、英語・英文法・国語・漢字・歴史等を学び、オランダ人の先生から洋裁や料理などを習い、当時の女性としては、最高の教養を身につけていた。明治5年に仮学校女学校が開校し、8年に札幌に移り、翌年の5月に廃校している。山際とは恐らく江戸で会い、お互いに会津藩と北海道滞在の縁で結婚への道を歩くようになったのであろう。

明治13年の北海道赴任は、「五月七日大雨開拓使へ出頭本日立届書ヲ出ス」で始まる。8日横浜を出立、11日函館着、開拓使に勤める義父等を訪問し、再び出帆、小樽に入港して15日に札幌入りした。この記述から、有名な平河町先生宅で撮った別れの写真の添書にある明治13年5月8日は間違いで、それ以前に撮ったものと考えられる。

5月16日、開拓使庁を訪れ、煤田開採事務係を命ぜられた。24日、雁木村より丸木舟で対石狩に

出て夕方には幌向太に着いた。翌日、馬で岩見沢を通り、午後幌内に至り、島田純一の出迎えを受けた。翌日から、測量のため、幌内、早川村、イチキシリとの間を往復した。6年前に山内・賀田・坂・西山・桑田と共に測量した思い出深い土地であった。

9月3日、イチキシリ測量を終了し、幌内に戻ってしばらくして岳父神尾英俊の病気を知り、札幌に出かけた。1週間余り旅と見舞に過ごし、帰着して間もなく、イクシベツ上流の石炭点検に取り掛かることになった。

9月20日、山際は、島田純一、測量夫四人、坑夫熊五郎の外に、イクシベツに偶然に來合わせていた千歳アイヌとで朝幌内を出立した。

一 此ニ「ポロフニソマナイ」「チカンベ」等ノ支流アリ三里余ニテ左ヨリ流ルニ大支流アリ此ヲ「ボンベツ」ト云フ此ノ二又ヨリ僅オゾハツル斗トイクシヘツヲ上リ石炭ノ露出アリ其ノ大ナルモノ十五尺斗バカリカアリ之ヲ調査シ夫ヨリ「ボンヘツ」ヲ壱里程上リ同処露宿ス(注2)

何と簡潔な記録であろうか。こうして山際と島田は、幾春別炭田を発見し、日本地質学史に残る功績をあげた。

初雪が降り寒気がきびしくなった10月初旬に、本格的な調査が行われた。ボンイソオマナイとタカンベ両支流近辺に一夜ずつ泊まって、10日にボンベツに達し石炭調査を完了し、16日に幌内に戻って、約1週間調査報告書や地図作成の舎業に専念している。

23日、神尾英俊の訃報を聞き、再び札幌に赴き、滞在中に徳三郎の兄開拓使媒田開採事務長の山内提雲らの幾春別石炭見分出張が決った。30日、山際は、先駆の任を受けた山内徳三郎と共に帰途についた。幌内太近くで突如雨風が起り、「寒気甚シク困難云ハン方ナシ」と記している。北海道の奥地は、すでに厳寒が猛威をふるい、翌日幌内出張所にようやく着いた。降雪は尺を越えていた。

11月1日、山内は、消雪まで見分を見合わすように兄提雲に手紙を送った。山内徳三郎と山際たちは、14日に、実地石炭見分のため、幌内を出立、奔別太から幾春別に向かった。寒気肌を刺し、河

水は寒冷で困難を極めた旅であったが、無事終了し帰路についた。しかし途中で思わぬ出来事に出合った。山際の日記を辿ってみよう。

彼はボンイソオマイより数丁幌内に近い処で、三人の騎者がすっと駆け過ぎるのを見た。事務長の一行ではあるまいかと頻りに心配したが、深く問わず、幌内太に戻ると果して彼らと知り、馬追いアイヌのサンクルと大夫の末松を伴い後を追うことになった。あたりはすでに薄暮で、ともかく酒と夕飯をとり、山河を駆けて行くと、ようやくポロフニソマナイの河口で馬蹄の跡を見付けた。しきりに高声で呼びながら走って行くと、しばらくして遠方より応じる声があり、馬を飛ばし、タカンベ河口で追い付いた。アイヌ小屋に案内し、握飯を食べ、そこからまた馬で幾春別に8時頃ようやく着いたが、前夜と同じ様に、天幕の前で石炭を焚き寒さをしのいだ。翌日、事務長一行を幾春別炭層に案内し、このドラマをめたく終えている。

山際の幌内厳冬日記は、義母と妻春が遠路訪ねてきた数日を除き、真に簡単な記述しか見られない。ここから稲垣 栄の孫実吉輝子が、女子学習院在学中夏休みの宿題のため伯母山際 春の口述を書きとったものに舞台を移す。

5月に山際は北海道に出発した後、春は東京に留まっていたが、10月に父が危篤と知ると、母姉と共に急ぎ札幌へ旅立った。18日、函館の宿で父が亡くなった夢をみたが、24日に札幌の家に着いた時は、果して初七日が行われていた。

仏事をすますと、子供がある姉と9月にすでに父を訪れていた弟は、すぐに東京に戻らなければならなかった。ようやく二人は、開拓使の好意でその年の最終東京行きの船に乗ることができたが、今回の船は翌年の4月なので、春と母は札幌の越年を余儀なくされた。山際は、「幌内炭坑は女の住める処ではない」と言い、彼の僚友島田純一は、「女だと言え住めない処ではない。君が行かなければ自分が行く」と言って、二人を迎えに島田が札幌までやってきたと書いているが、山際の日記によると、善意で積極的な島田の独断行動であつたらしい。

—— それから島田氏に連れられて、母と妹(山際 春)は石狩川を上って行った。丸木舟である。丁度坐れる位の幅で坐ってしまふと向き

も変へられず、身動きも出来なかった。三人は雪が降っているので傘をさして居た。船頭だけが立って竿で船を進めて行った。始めの中は三人で話しながら行ったが、後には寒さと疲れで其の気力もなくなった。河は、兩岸から氷が張って、真中だけ水が流れている。其所を舟が通って行くのだが、時々ズズッと氷の上に乗り上げ動けなくなる。それを竿で氷をつき破っては又舟を進めて行った。やがて日が暮れ、真暗な中をなほだんだん上って行くと、間もなく木の陰から燈が一つ見えて来た。其所は幌内太と云って山の中に一軒の小屋があるのだった。(注3)

女性ならではの細かい旅の描写である。人夫小屋で一晩を明かし、お握りを作ってもらって、早朝馬に乗って幌内に向った。馬の背中にビール箱のようなものをつけ、それに薄い布団が敷いてあり、山路を行くとがくがく揺れたと描写している。岩見沢の無人小屋で昼食し、やっと幌内太に辿り着いた。そこには小屋があって一家族が住み、小川に沿ってもっと奥へ入ると、目的の西洋館があった。幌内炭坑の社宅で4間あり、建物の後方に石炭を掘る縦穴、少し離れた山側に横穴がある。

ここから再び山際の日記に戻る。前日の12月3日に人夫が届けた島田の書状で、神尾の母と春が幌内太に着いたことを知った。「予は家族共に<sup>すて</sup>已に東京に出発せし事と思いをりしに<sup>あにはか</sup>豈計らんや」と<sup>きようがく</sup>驚愕している。翌日、「何故に来たか」が山際の意見だったが、二人の憔悴した姿をあわれみ、越年しなければならぬ理由もわかったので、山内事務長の内命通り、新役所の一部に住むことになった。

暖房がよく効き、外は東京の真冬より寒いのに、羽織なしの社宅生活は快適だった。しかし酷寒で交通が絶え、米蔵に貯蔵された米以外は、調味料すら手に一すくいする程しか買えなかったので、山際と島田は狩猟に精を出した。

春がやって来ると、4月、春と義母は幌内を引き揚げた。7月には、幾春別新道測量が始まり、しばしばポツタア、ブラオン(ジョン・ダグラス・ブラウン?)、山内徳三郎等が訪れた。日記は9月5日で途絶えている。

この年の末、工部省鉱山局出仕を命ぜられ、島田と共に東京に帰った。当時、完全な凶面を作成

できるのはライマンの助手たち以外になく、彼らの実力が大いに買われた。「彼らが社会にでてから大いに活躍し、あれもライマンの弟子だ、これもライマンの弟子だと<sup>はんてん</sup>喧伝されるようになった」と松本健次郎が「人物回顧」で語っている。

## 2-c. 隠れた豪傑

—— 其頃のことで思い出すが山際という男は非常に頭のいい男であった。自分等は調査したことを綿密に筆記していたが、山際は有名な筆不精であったから容易に筆記などはせぬ。其代に実によく記憶していた。其強記に驚かされたことは一再でなかった(注4)。

上記は助手の一人杉浦讓三が書いた「私の役人生活」からの引用である。筆者は、アメリカでの資料探しの不成功が自分の手落ちでなく、山際の筆不精によることを知り、胸を撫で下した。これが故山際永吾を称えた新聞記事の見出しの「隠れたる豪傑」の一面にふれた最初である。

工部省が廃省になった後、農商務省で通算14年余り精励勤務した。明治27年(1894)1月から30年3月、榎本武揚が農商務大臣に在任中、鉱山局長山内徳三郎の下、山際は鉱業課長として、彼の真価を十分に発揮することができたであろう。ライマンは、当時プリンストン神学校の学生だった梶原長八郎から、彼の伯父山際の昇進を聞き大変喜び、日本滞在以来の親友Dr.マッカーサーへの1895年6月9日付の手紙で、山際が鉱山局で2番目の地位についてと誇らかに語っている。

明治30年に職を辞し、入山採炭会社に入社、取締役および同炭坑所長となった。西山正吾は「(山際は)氣宇壮大で、経世実業の諸問題に対し、洞察的活眼をそなえていた」と述べている。彼の在職15年間に会社を再起させたのみか、大いに躍進させた。

大正6年(1917)3月8日、山際は64歳の人生を閉じた。死亡広告には友人総代として、最初に島田純一、続いて和田維四郎・山川健次郎・郷誠之助・頭山満・安川敬一郎の名が並び、山際の交際範囲の広さ、豊かさを語っている。自由民権主義者から後年政界の黒幕、右翼の巨頭となった頭山満は、「(山際と)私とは30年来の交際だったが何

地學雜誌

○ 地性論(適當ノ譯語ヲ得)英國地質雜誌摘譯山際永吾  
 凡ソ巨大ナル書圖ヲ畫シニ數々筆ヲ摺キ數歩ヲ退テ其全  
 體ヲ檢閲セザレハ精妙ヲ爲ス能ハサルカ如ク藝術學業ニ  
 於テモ唯一隅ニノミ偏倚セズシテ以テ時々其全局ヲ諳明  
 セスンハアル可カラス因テ茲ニ地學ノ大要ヲ掲出セン蓋  
 シ事物ヲ考究スルニ簡單ニシテ能ク通知セル實事ヲ基本  
 ト爲シ漸次ニ錯雜ニシテ明亮ナラサル事項ニ論及スルキ  
 ハ了解シ易キヲ以テ疑ハズスル稍少カル可シ  
 今海濱ニ佇立シテ目ニ觸ル、萬物ノ理ヲ考究センニ激浪  
 岸ヲ拍チ疾風面ヲ拂ヒ陰雲遙ニ横リ細流脚邊ヲ遶リ懸崖

地學雜誌第七號

背後ニ峙テリ是ニ於テ波ハ何ニ因テ起ル乎ト問ハ、三才  
 ノ童子ト雖モ波ハ風ニ因テ起ルト答フルニ敢テ躊躇セザ  
 ル可シ○初メ平滑ナル水面ニ於テ唯一點ノ攪擾ヲ起スモ  
 其皺紋風ニ隨テ次第ニ擴張シ遂ニ大浪ト爲リ暴風ノ時ハ  
 數丈ノ高サニ達スルアリ蓋シ海水ハ唯動搖スルノミニテ  
 敢テ波ト共ニ運行スルモノニハ非サルナリ故ニ水鳥ハ波  
 ニ隨テ浮沈スルニ更ニ其位置ヲ變スルヲ睹ス然レトモ波  
 ノ汀渚ニ達スルヤ其下部ハ海底ノ摩擦ニテ抑止セラレ上  
 部ハ猶前進シテ岸ニ激シ其退去スルニ當リ汀渚ニ散布セ  
 ル土石ヲ携帶シ去ルナリ  
 復々波ハ何ヲ爲ス乎ト問ハ、則海灣ハ汀渚ニ散布セル土  
 塊石片ヲ携帶シ去リ或ハ截然タル岨崖ニ突激シテ自カラ

第5図 山際永吾訳文, 地学雜誌, 第7号, 明治12年7月(マサチューセッツ大学図書館蔵).

から何まで偉かった。人間の大きさは何れ程だったか一寸判らないが、非常な乱暴者でも山際が現れるとおとなしくなった。義理の堅いことも当節に珍しかった」と山際を追惜した。隠れた豪傑への惜しみない賛辞である。

3. 稲垣徹之進

稲垣徹之進は、三重県志摩国鳥羽で生まれた。北海道地質測量生徒表の引請人の欄に、芝新銭座近藤真琴とあるので近藤との関係を調べると、稲垣が攻玉舎の学生であったことがわかった。近藤は、稲垣と同じく鳥羽藩の出身で、蘭学を修め英語に長じ、幕末には幕府海軍操練所翻訳方、測量学科教授補助等の役についている。明治2年に攻玉舎を設立し、その後航海測量習練所や陸地測量習練所を設けた。攻玉舎は、当時、新知識新技術を教え、若い人々の教育に努め、慶応義塾と肩を

並べる勢いであった。

稲垣は、ライマンの助手として、北海道地質測量調査、越後油田地質調査に約7年を過ごした。ライマン離日の年明治13年(1880)には、工部省の命で、院内銀山詰として、陸奥に赴任した。翌年筑前鞍手郡の炭田を跋渉踏査し、明治15年、三池鉱山局へ転任した。

明治21年(1888)頃から、政府の官業事業払下げが行われ、三井は三池炭鉱を購入、団 琢磨が三池の事務長に就任した。稲垣は、鉱山局の課長をしていたが、官を辞して、筑豊炭田大辻炭坑に入ることになる。5年程前に、三井物産に移った賀田貞一に次いで民間入りをした。

団は、稲垣の身に付けた近代鉱山技術、円熟した手腕を考慮に入れて、彼に白羽の矢を立てたに違いない。さらに短期間ではあったが、三池鉱山局時代の彼の三池炭鉱に関する知識を見込んでのことであろう。団は彼について、「思い出す事ども」で



第6図 稲垣徹之進(右枠内)と家族。前列中央が稲垣栄(山際永三蔵)。

次の様に語っている。

ここで一寸記録して置きたいのは、稲垣徹之進氏の作製した測量図面の事である。稲垣氏は北海道開拓使が招いた外人技術者ベンジャミン・ライマン氏の弟子で、其稲垣氏が恩師から教えられた独特の測量法を用いて三池炭田の図面を作成した。其図面は地形と炭層の状態を同時にあらはしたもので、即ち此処で採掘すれば何尺下(かくかく)にどういふ状態で石炭がある、という事を較々正確に測定したものであった(注5)。

採掘してみると幾分相違していたところがあって、図面を修正したようだが、団は三池炭坑の計画上非常に重宝し、稲垣の図面を三池の玉手箱と呼んだ。

稲垣は、5年後に大辻炭坑を去り、佐賀の唐津炭田の一つ杵島炭坑の鉱主となり、採掘に着手した。明治31年(1898)に、明治炭鉱の専務に就き、九州鉱業界の泰斗として重視された。

明治35年(1902)の初めに、ライマンは、島田純一の手紙で秋以来稲垣が病床に臥しているのを知ったが、間もなく、子息の稲垣米門から父徹之進の死亡通知を受け取った。悲しみの中で、稲垣が残した立派な家族が何よりの慰めであると書いた悲嘆と安堵を交えた弔文を米門に送った。ライマンの滞日中、病弱だった三沢思襄の死で、始めて助手を失ってから、4半世紀が過ぎていた。ライマンは、助手たちがもうヤングメンでないことを認識すると共に、時の流れの早さを痛感したであろう。

#### 4. 杉浦謙三

杉浦(旧名高橋)謙三の懐旧談「私の役人生活」は、4ページに過ぎない文章であるが、一通り彼が歩んだ道を想像出来たし、彼の人柄を垣間見ることができたと思う。

杉浦は、嘉永6年(1853)に江戸で生まれたが、少年時代に越後新発田で漢書や剣術を学び、戊辰戦争に加わっているから、新発田藩の出身とみなしてよい。幕末に父親が函館奉行だった関係で、明治になると父に従って函館に移り、しばらくして開拓使仮学校に入学した。記録によると、明治6年4月21日に入学とある。しかし、明治6年のライマンの第一回北海道地質測量調査に加わっているのので、明治6年の入学は間違いとみてよい。地質助手時代が終ると、賀田、稲垣と共に工部省に留まり、鉱山技手として日本全国を東奔西走し、調査を行った。

杉浦は、鉱山局に8年位いたと語っている。しかし、ライマンへの明治25年(1892)付の安達仁造の手紙に、「山際と杉浦は鉱山局」と報告しているのので、彼の思い違いであろう。

其後私は広島(の)の監督署にやられた、さうしてそれが私の役人生活の最後であったのである。当時の鉱山局長は和田維四郎氏で田中隆三氏が広島(の)の監督署長であった。ところが私は何かのことで非常に腹を立てた今それを思い出さうとつとめるがどうも理由が判らぬ。大臣に不平があったのか、局長に不平があったのか、兎に角非



第7図 杉浦謙三(左から二人目)と家族(山際永三蔵)。

常に気に喰はぬことがあって、郵便で辞表を差出しスッパリとやめてしまった(注6)。

あっさりと野に下り、その後、別子銅山改革の夢を抱いて住友鉱山に25円の薄給で入社した。彼は結局夢を追い続けて人生を終えたようである。

アメリカのライマンコレクションで、杉浦に関する手紙を2通見付けた。1通は、ライマンが杉浦に書いた礼状のコピーで、もう1通は、彼の息子に関する手紙であるが、宛名は杉浦ではない。2人のKenichi, 1人は杉浦の息子、もう1人は坂市太郎の息子がアメリカを発つ前に、フィラデルフィアのライマンを訪れることを知らせてくれた賀田貞一に対してライマンが大正2年(1913)7月3日付で書いた返信である。書面に孫に会う祖父のような喜びがふれている。

「ライマンは法学士と工学士だったが、学者としてよりも実地家だったせい、助手たちも実地の方がうまく、学理の方は不足していた」と杉浦は書いている。ライマンが地質技術教育を優先していたことは前に述べた。しかし助手たちに自然科学に関する本、論文、ジャーナル等を与え、訳、討論、著作を勧め、地質学の世界へ目を向けさせた。その結果が地質学社の誕生で、明治11年(1878)に創設し、翌年1月「地学雑記」第1号が発行された。掲載された著作は、ライマン著「北海道地質総論」やチャールズ・ライエル著「地質原論」等の訳が多い。「地学雑誌」第6号に、杉浦の「地球上乳獣ノ配置(米国諸学講談雑誌ヨリ抄訳)」が掲載されている。当時の翻訳は不完全な英和/和英辞書に頼り、専門用語は英英辞書でひき、時には自分で新語を作らねばならない大事業で、苦勞は並大抵でなかった。後年、幼稚と言われても仕方ないが、その意欲は大いに評価すべきである。不幸にも、明治初期に早急に必要だったものは、彼らの鉱山技術であったため、助手たちはだんだんと執筆から遠ざかって行った。

ライマンは、調査中を除けば、フィールドノートブックを覚え書きとして用いている。通常、至って簡潔、無味乾燥な記述のせい、明治10年(1877)2月5日の記述は、興味深い。「昨夜は大雪、今日は晴れ上がり、午後になってたちまち雪がとけ始めた。オフィスの仕事は9時から3時40分頃までで、

最後の30分あまりは、助手たちに明日から始まる授業について説明した。今日は書斎の前の梅の花が一、二輪咲き、裏の小さな梅の木の花も開いた。T(高橋)は今日、義父の杉浦の姓に変えたと告知した。」読み終えて、大雪・梅の花・平河町屋敷・教室、そしてライマンと助手たちの姿が眼前に浮かんだ。杉浦の改姓に言及したのは、養子になると姓が変わる珍しい日本の慣習に、ライマンが大いに興味を持ったからに相違ない。

## 5. 前田精明

日本でも前田精明の資料が殆ど見付からないから、アメリカでは皆無ではないかと覚悟して資料集めた結果、2枚の3"×5"のカードの表裏にデータを書く程の資料が集まった。

前田精明(友野鴻次郎)は、安政元年(1854)5月27日、松代藩士族として江戸で生まれ、前田量平の養子となった。明治5年、18歳の時に開拓使仮学校に入学し、明治7年に島田純一・西山正吾・山際永吾と共にライマンの第二回北海道地質測量調査に参加した。この時、将来人生の4分の1程を北海道で過ごすことを予想しただろうか。

明治9年の日本油田地質調査中、山内徳三郎が目を患い休んでいた期間、ライマンに「その件は前田がよく知っています。急ぎの場合は、彼に聞いてください」と答えている。この頃から、山内と前田は気心の知れた仲ではなかったかと思う。明治13年(1880)ライマン離日の年に二人は開拓使に戻り、茅ノ澗と幌内の石炭調査に従事した。その後、山内の明治23年の宮内省入り以外は、開拓使・農商務省・北海道庁・再び農商務省と彼が移る度に後を前田が追っている印象を受ける。結局ライマン北海道調査から北海道庁非職まで北海道で16年を過ごした。

榎本武揚が明治27年(1894)に農商務大臣に就任すると、山内徳三郎が鉱山局長心得になり、前田も復活して福岡鉱山局監督署に勤務した。その年に山内は博多を訪れ、筑前グループの安達・稲垣・島田・杉浦・西山・前田と久しぶりに顔を合わせた。往年の思い出に、大いに話に花が咲いたことであろう。山内を囲んで撮った写真は、早速フィラデルフィアに送られ、受け取ったライマンは至極



第8図 前田精明(右から二人目)と家族(山際永三蔵)。

満悦であった。山内と前田の最良の年だったと思う。

明治30年(1897)、榎本が農商務大臣を辞職し、山内は免職、山際が入山採炭の所長になり、2年後西山が三井鉱山に入社した。前田は明治35年(1902)に博多にいたことが、島田の報告でわかるが、その動静は、はっきりしない。

明治42年(1909)に東京に戻った時は、すでに心臓病を患っていたようである。山内の手紙で、前田が快方に向かっていることを知り喜んだのも束の間、大正5年(1916)の始めに、ライマンは賀田貞一と前田の死去を同時に知った。安達に前田家の悔やみ状を託すと共に、「もう一度日本を訪れ、皆と会おうと思っていたのに、余りにも遅延し過ぎた」と8歳のライマンは、安達に悔悟の言葉をもらしている。

6月になって、東京高等商業学校(戦後一橋大学)に入学した前田唯一の手紙が届いた。彼はライマンの弔文に感謝し、父の友人であるライマンの助手たちの母や妹への親切を伝え、自分は三菱重役S. Kirishimaの好意で、書生になって新しい人生をスタートしたことを告げた。また、学校の商業地理学の講義で、ライマンと助手たちの地質調査について聞いて、それに参加した父を持ったことへの誇りと感銘を述べている。

ライマンは、立派な英語で書かれた手紙を読み、前田精明が頼もしい息子を残したことを喜び、明治9年6月、越後油田調査の折、信濃松本で新婚の前田夫妻を助手たちと訪れた思い出を唯一に語っている。安達仁造が赤痢にかかり、長野で数週間滞した時、薬湯で彼を治した医師は、前田の知友であった。入牢中、佐久間象山からオランダ医学を学んだ金子と云う医師で、責任感が強く、筋を通し、礼儀正しく、矜持をもっていた。医師と前田のイメージが重なり合い、40年前の信濃油田調査の記憶がよみがえり、ライマンは、しばらく思い出にふけったかも知れない。

昨年の暮れ、マサチューセッツ大学図書館文書資料部長のMrs. リンダサイドマンに、前田精明の孫シスター前田澄子からライマンコレクションを見学したいと電話があった。しかも、彼女の住んでいらっしゃるケンブリッジは、車を走らせると、2時間余りのところにある。青天のへきれきでしばらくの間信じられなかった。しかし、間もなく前田精明の資料が1995年の阪神大震災で喪失されたことを知り、大変残念であった。顧みると、ノースハンプトンのフォーブスライブラリーでライマンコレクションを見付けて以来、幸運がいろいろな形で訪れた。シスター前田との出会いでも新しい発見を期待している。

#### 訂正

ライマン雑誌(18)について(2000年11月555号)

23頁 第2図の説明文

正(マサチューセッツ大学図書館蔵)

誤(フィラデルフィア自然科学院図書館)

#### 引用文献

- 注1 西山正吾(1917): 故山際永吾君小伝, 日本鉱業会誌, vol. 185.
  - 注2 山際永吾(1880-1881): 日記, p.15.
  - 注3 山際 春口述, 実吉輝子記録, p.22-23.
  - 注4 新聞切り抜き, 1917, 3月11日?
  - 注5 団 琢磨(1926): 思い出す事ども-其頃の三池と筑豊, 石炭時報, vol.1, p.601.
  - 注6 杉浦謙三(1928): 私の役人生活, 石炭時報, vol.3, p.377.
- 引用分の不明瞭な語は空白にし、草書は楷書にし、当用漢字に変更したものもある。

FUKUMI Yasuko (2001): A note on Ryman (19) -Lyman and his assistants Ⅷ-

<受付: 2001年5月29日>